和光中学校学校通信　*生徒会スローガン「自学豊心 ～前向き・励まし・思いやり～」*

ひかり

令和５年９月６日
第 ５ 号

夢を叶えた人は

写真の「須東裕基さん」は、今から 15 年ほど前、三豊市のある中学校で３年４組の担任をしていた時の生徒です。彼はクラリネットを吹くのが何より好きな穏やかな性格の少年でした。進路面談で一貫して「音楽の道に進みたい。」と語っていた彼が、ある日、受験すると言った高校は「東京藝術大学音楽学部附属音楽高等学校」でした。

東京芸大という大学は知っていたものの、附属高校については合格レベルも何も分からないので、すぐに音楽科の先生のところに行って尋ねました。先生から返ってきた言葉は、「とんでもなくレベルが高いです。楽器の実技試験だけでなく学力検査でも高得点が求められます。とにかく日本だけでなく海外からも受験するほど、音楽界では No.１の高校です。『藝高(東京藝術大学音楽学部附属音楽高等学校の略称)』を受検する子は、たいてい１時間数万円のプロのレッスンを何度も受けて受検に臨みますよ。」でした。それを聞いて、「学力は大丈夫だろうけど、プロのレッスンを受けるなら飛行機で東京に通わなければ無理。そんなことができるのか･･･。」と、少し絶望にも似た気持ちになりました。でも、その直後、「待てよ。彼ならば、もしかしたら合格できるんじゃないか。」というかすかな期待が心の中に芽生えてきました。なぜなら、彼がどれほどひたむきにクラリネットを愛し、寝る間も惜しんで練習してきたかを知っていたからです。

その後、あっと言う間に月日が経ち、年が明けて受験の日が迫ってきました。入学選抜の専攻は「作曲、ピアノ、弦楽器５種類、管楽器 13 種類、打楽器、邦楽」それら全部で合格者はたった 40 人。一次試験(実技①)、二次(実技②)、三次(「聴音」等の音楽科目)、そして四次(学力検査)、面接の全ての難関を突破した者だけに合格が許されるのです。一つの専攻につき合格者は１名、多くて２名です。

いよいよ東京へ出発する日。同行するお母さんに「合否結果がわかったら帰りの会の時間に私の携帯に連絡をください。教室で待っています。」と伝えました。そして待ちに待った一次試験の日の帰りの会の時間。皆でじっと息を潜めて連絡を待っていたそのとき、携帯が鳴りました。「もしもし。」と言ったとたんにお母さんの「先生、一次合格しました。」の力強い声が返ってきました。「うわあ、やりましたね！おめでとうございます！」の「おめで･･･」のところで教室はすでに歓喜の嵐。「やったー！ゆうきー、おめでとう！」の大合唱。声が裕基に十分聞こえるように携帯を皆の方へ向けた後で、「明日も連絡を待っています。」とお母さんに告げてから電話を切りました。皆に向かって、「まずは第一関門突破。でもこれからますます厳しい戦いになる。裕基なら必ずやってくれる。信じて吉報を待とう。」と言いました。そして翌日、二次の結果を聞いた教室は再び歓喜の嵐となり、その翌日、また翌日と、４日目の最終合格まで、楽譜のクレッシェンド記号「＜」のように、日増しに「うおーっ！」の雄叫びの声も大きくなっていきました。こうして「奇跡の合格劇」は、受験という怪物に立ち向かう級友たちに「誰にも負けない努力をした者は必ず合格する」と教えてくれたのです。

さて、須東さんが夢を叶えるまでの道のりには何があったのでしょうか。彼には、受験生の多くに与えられていた高価な楽器も高額なプロのレッスンもありませんでした。あったのはお母さんから譲り受けた『お古』のクラリネットだけ。それをひたすら丁寧に手入れして、毎日夜遅くまで練習したのです。不思議な縁で、本校の真鍋先生は須東さんの中学時代のクラリネットパートの後輩です。「当時、部活の休憩時間も休まず練習している須東先輩を見て、一体いつ休むのだろうといつも思っていました。」と語ったことから分かるように、演奏への熱い思いは中学時代からすでに並外れていたのです。

現在須東さんは東京シティ・フィルハーモニック管弦楽団副首席クラリネット奏者として活躍しています。８月 27 日、レクザムホールのステージでソロ演奏を終えた時、進行役が「次の目標は？」と尋ねたら、彼は昔と全く変わらない自然な笑顔で、「もっと上手くなりたいです。」と答えました。